

漢方薬の名前



若い頃に和漢診療部のある大学病院に勤務していた関係から、煎じ薬やエキス剤を通して様々な漢方薬の名前に接してきました。「何故、このような名前が付けられているのか？」がいつも疑問で、自分なりの結論を出してきたごく一部を紹介してみます。名前の由来を知るとその漢方薬の性格が分かる場合も多いようですし、とっつきにくかった漢方薬に興味も湧くかも知れません。

1) 四獣の漢方薬名

中国の神話には天の四方を守る「四獣」と呼ばれる仮想の霊獣が出てきます。色とも関連付けされており、東を守るのが「青龍(セリョウ)」(青色の竜)、南を守るのが「朱雀(ズク)」(赤色の鳥の霊獣で鳳凰ともされる)、西を守るのが「白虎(ビヤッコ)」(白色の虎)、そして北を守るのが「玄武(ゲンブ)」(黒色の亀と蛇を合体化したもの)となっています。これらの名前が漢方薬に付けられているのですが、例えば小青龙湯、大青龙湯など「青龍(竜)」の名前が付与された漢方薬があり、白虎湯、白虎加人参湯など「白虎」の名前が付与された漢方薬もあり、さらに真武湯という名称は、元は玄武湯と名付けられていたという記事が大塚敬節著「傷寒論解説」(1976年)に掲載されており「玄武」の名前も見られます。

ところが「朱雀」の名前が入った漢方薬が身近にはありません。玄武が真武になったように名前を変えて今に伝わっているのかもしれないと思いつつ分からないままでしたが、インターネットが普及した近年、十棗湯が朱雀湯に相当するのではないか説を知りました。含まれる大棗の色が赤っぽいので有力な説だそうです。しかし十棗湯は傷寒論解説では『芫花、甘遂、大戟という強力な瀉下作用を持つ生薬を粉にしたものを大棗で煮出した湯に入れて温服する』とあり、かなり強い利尿作用があるようです。つまり体力のある心不全患者が対象になる劇薬的イメージです。他の3つの漢方薬と比べるとかなり激烈なイメージがあるので朱雀湯は、実は十棗湯では無く、長い歴史の中で消滅してしまったのではないかと想像してしまいました。ちなみに四獣からはその薬効を類推できませんでした。

2) 主生薬が漢方薬名

主生薬の薬効を理解できれば漢方薬全体の薬効も理解できそうな漢方薬になります。

①一生薬のみが漢方薬名となるケース

漢方薬は複数の生薬で構成されていますが、その漢方薬の薬効を代表する1生薬が漢方薬名となっているケースになります。麻黄湯、葛根湯、桂枝湯、麻子仁丸などがあります。

②複数の生薬名が漢方薬名となるケース

同様に2種類以上の生薬が漢方薬名となっているケースもあり、当帰芍薬散、半夏厚朴湯、半夏白朮天麻湯などが代表例でしょうか。各生薬の薬効で全体の効果が類推できます。

③すべての構成生薬名が漢方薬名となるケース

一部ではなくすべての構成生薬をそのまま、もしくは略して漢方薬名としているケースもあり、長い名前になる場合もあります。芍薬甘草湯、麻黄附子細辛湯、苓甘姜味辛夏仁湯(茯苓、甘草、乾姜、五味子、細辛、半夏、杏仁)、苓桂朮甘湯(茯苓、桂皮、蒼朮、甘草)などがあります。

3) 漢方薬の効果と関連付けさせた漢方薬名

効果と関連付けさせた名前の漢方薬はどのような効果があるのか類推できるので便利です。

①効果を漢方薬名にしたケース

消風散、清暑益気湯、清上防風湯、大建中湯、補中益気湯、抑肝散などかなりの数があるようです。消風散(風邪(フウジャ))は眼には見えない細菌、ウイルス、抗原などとされる病気の原因(病邪)の一つになりますが、それによる感染性の皮膚炎や蕁麻疹などの症状を消すという意味になるでしょう)、清暑益気湯(暑も病邪の一つで暑熱刺激を現わし、清は熱を冷ます・抗炎症という意味をもちます。益気は不足した目に見えない体のエネルギーの気を増す(益す)という意味があるので、夏の暑さでほてった体を清め冷ましバテた体を元気にするという意味になります)、清上防風湯(上は主に顔面や頭部を意味しており、風邪(フウジャ)によって起きた顔や頭部の炎症(発疹、化膿、充血など)を清め(抗炎症)、風邪の影響を防ぐという意味になります)、大建中湯(中は主に腹部を意味しており、弱った腹部(特に腸)を大いに建て直し、症状を改善するという意味になります)、補中益気湯(中を補う、つまり腹部の消化機能が弱った状態を改善し気を増し(益し)て元気を取り戻すという意味になります)、抑肝散(肝は五臓の一つで新陳代謝、血の貯蔵などの機能の他に精神活動を安定化する機能をもっており、肝で気と血水のバランスが狂い、気が過剰になるとイライラと怒りっぽくなったり、頭痛となって現われます。肝の興奮状態を抑制してイライラや不眠を改善するという意味になります)。

②代表的生薬と効果を漢方薬名にしたケース

半夏瀉心湯、人参養栄湯などがあります。半夏瀉心湯(半夏は気逆や水滯を治し、心は五臓の一つで血液循環の他に覚醒・睡眠のリズムを調整するとされています。瀉は下す意味があり過剰・興奮状態を抑えるという意味になりますから、心の機能の興奮状態で起こる不眠、精神不安状態を改善する働きになりますが、これらは応用編で、この漢方薬は心と部位に近い心窩部付近の異常つまり悪心・嘔吐などの胃腸症状の気逆状態の改善に主に利用されます)、人参養栄湯(養栄は栄養の倒置ですが体を元気づけるという意味では同じと考えてよいでしょう。本薬の対象になる人は気と血の両方が不足した体力がかなり衰弱した人に、気を増加する生薬の人参を配合した漢方薬という意味になります。補血作用のある地黄なども含み実際には全12種類もの生薬で構成される漢方薬になります)。

③別名で効果を示す漢方薬のケース

八味地黄丸(八味丸)は8種類の生薬(八味)で構成される地黄を主薬とする漢方薬の意味になりますが、別名で腎気丸と呼ばれ、五臓の一つの腎の気が少ない状態を改善する漢方薬の意味があります。腎は排尿などを含む水分代謝の調整の他に成長・生殖、骨形成、呼吸、思考能力の保持など様々な機能があるとされ、腎の気が不足すると精神活動低下、性欲低下、骨粗鬆症、浮腫、夜間頻尿などを伴います。八味地黄丸の別名が腎気丸と知っておくと薬効の類推も可能になります。

また牛車腎気丸が八味地黄丸に牛膝と車前子という二種類の生薬を加えた十種類の生薬で構成される漢方薬であるというのも容易に想像がつかます。牛車腎気丸は別名を牛車八味丸とも言います。牛膝と車前子は共に利尿作用(水を巡らして水滯を改善する≒利尿作用)をもっているのが牛車腎気丸は八味地黄丸より浮腫傾向が強い人に適するということが分かります。

4) 合方が一部略された漢方薬名

合方とは二種類以上の漢方薬を同時に服用することで、煎じ薬の場合は二種類以上の漢方薬で重複した生薬があると1日量の多い方の量で調剤します。柴陷湯(小柴胡湯と小陷胸湯の合方)、柴朴湯(小柴胡湯と半夏厚朴湯の合方)、柴苓湯(小柴胡湯と五苓散の合方)などがありますが、小柴胡湯との合方例しか私には思い出せませんでした。

【まとめ】漢方薬の名前はそれらを開発した人が思いを込めて付けた名前だと思いますので、本当の名前の意味は知る由もありませんが、自分なりに漢和辞典などを駆使して漢字の意味を理解して漢方薬の薬効を考えるのはありだと思います。

(終わり)